

2019・8月17日の新大阪セミナー

セミナー開催の時期は、相場のタイミングと流れを読みながら、開催日を決めています。

今回のセミナーは、世界的に広がる経済への不安がMAXに近いところから、今後の展望を解説します。

※注1 炭鉱のカナリアとは、金融市場で長短金利逆転、金価格上昇、景気後退の兆候時に使われる言葉。

米国の10年債利回りは低下、一時長短金利が逆転する現象まで発生し、長期債にキャッシュを振り向ける動きが加速しました。

移動平均線からみた乖離率は、現在の米国10年債を参考にすると、リーマンショック後の水準にまで到達しています。そろそろ債券へのリスク回避的な購入は一巡と想定しています。

世界の金融市場は陰の極に到達した可能性、ここ最近の日経平均株価指数が20000円どころで下値抵抗力を見せているのも、その兆しと考えています。

長らく続く株式市場の低迷、しかし、米国債との相関性を考慮すれば、そろそろ反転ムードが高まってもおかしくなく、炭鉱のカナリア(※注1)発生後から株価は長期上昇する傾向にあります。

機関投資家やファンドをはじめとした息の長い年金系と投機筋は、米長期債をはじめとし、100年債にまで手を染める有様、そろそろオーバーシュートが意識されるでしょう。

過去の米10年債利回り NYダウ、日経平均株価指数の相関性を見ると、先にNY株式市場が底入れをし、ついで日本株の代表格である225指数が追随しています。

3%台から1.5%まで下落した米10年債利回り、過去のデータを振り返ると平均して2年近いの長期上昇相場の出発点にもなっています。

逆イールド(長短金利逆転)発生後からおおよそ2年近く上昇する傾向が当てはまるのか、16日のNY大幅高は、その前兆と考えています。

株トーク

マーケットストラテジスト 坂口隆信